井寺
観世流改訂謡本
内 三

三井寺

解題

清水観音に祈りて別れたる母子の廻り会ひし事を、三井寺の鐘、中秋の明月、湖畔の風光等に結び合せて修辞麗しく作りたる曲なり。作の中心は其脚色に存せずして寧ろ景物より来る詩趣にあり。作者自らも恍惚として詩中の人となり、観音の利生を忘れて「鐘故に逢ふ夜なり」とのみ云へること興深しと見るべし。世阿彌の作と傳ふれども詳ならず。糺河原、粟田口の両勧進能に演ぜらる。

能之變式

能にても夢占の狂言出でずして素謡の時の如く謡ふ事あり。之を無俳之傳(テカシナシノデン)といふ。

謡ひ方梗概

本曲は謀(タバカリ)の物狂といひて狂女を装ふものなれば狂態の裏面に尚幽玄の心有るべきものなり。

シテ 前は子を尋ねて佛に祈るものなれば、稍打ちしめりたる心を以て静に謡ふべし。**サシ**は此要領にて、静なる内にも稍さらりと扱ひ、決して重々しくならぬやう心すべし。**下歌**は調子を更へて聊か緩め、**上歌**は餘り高めずしつとり謡ふ。此止メに睡眠の心有り。充分間を取りて次の詞より氣を起して謡ふ。**後**は三井寺に狂ひ来れる體なれば、「雪ならば」以下稍派手やかにさらりと謡ひ、漸次氣を掛くべし。「げにげに今宵は」の一節は月に興ずる心を清くさらりと謡ふ。「面白の鐘の音やな……」は一息おきて前よりも稍ゆるく心有りげに謡ふを宜しとす。**ワキとの問答**は氣を掛けて確りと受け流し、**鐘の段**に入りて**地との掛合**稍ゆるめて纏り好く謡ふ。**サシ**より狂氣を棄てゝ少しく静に謡ひ行く。**クセ**後の詞、**掛合**は氣を乗せてさらりめに謡ひ、「またわらはも……」をしつとり、「子故に迷ふ……」を氣を更へて詩句さながらの心に謡ふ。**ロンギ**は穏かにして然も喜びの心有るべし。

ワキ おしなべて健かに謡ふ。**次第**は素直に弛み無く**上歌**は朗かにあるべし。「桂はみつる」云々は確りと扱ひ、**シテとの問答**はシテを叱咤する心にて謡ふ。**ワキヅレ**は素謡にては一人、ワキに従うて謡ふが宜し。獨の詞は淀み無くさら〱とあるべし。

子 調子を高く、さらりと謡ふ。

地 「乱れ心や狂ふらん」は**カケリ**の前なれば勢好く附け、「月見ぬ里に」以下節をたつぷりと謡ひて運び好く稍浮きやかにあるべし。「月は山」云々は前の地よりも心持静に出づれど、月夜のながめを謡ふ処なれば、矢張晴れやかなるべきものとす。**鐘の段**は「許し給へや」より更へてシテと好く合期するやうに力め、「為楽と響きて」以下調子好く十分に謡ふべし。**クリ**は健かにすらりと扱ひ、**クセ**は上端前を静に、しみじみとしたる情趣を謡ひ現し、上端後は前よりも稍引き立て、ゆらりと謡ふを宜しとす。**ロンギ**は素直に、**キリ**は少しく運びて祝言の心に謡ひ納むべし。

辭解

南無 梵語。佛に向つて救濟を請ふ意。

大慈大悲 仁愛の廣大なる謂。観世音は慈悲の權化なれば此語を冠す。

観世音

法華経普門品に衆生が諸の若脳を受けし時観世音菩薩に頼み一心稱名すれば即時に其音聲を観じて皆解脱を得しむべしとあり。意譯

さしも草 新古今集に「なほ頼めしめぢが原のさしも草我れ世の中にあらん限りは」とありて其後に「此歌は清水観音の御歌とてなむ云ひ傳へたる」と詞書あり。よりて観世音の語に續け次の「さしも」の序辭に用ふ。さしも草は蓬の異名。

さしも畏き 是程畏き。

一稱一念 云々 南無観世音菩薩と一度称へ一度念じても利益ありとの意。

枯れたる木に 云々 千手陀羅尼に、観音の妙力によれば枯木にすら花咲くといへり。是はまして若木の緑子なれば再び逢はざる事あらんやとなり。

緑子 幼児。枯木に對して若木といひ、若木の縁にて緑子と續く。

あらた あらたか。

御合せ 云々 夢合せを謝していへるなり。夢合せは夢の吉凶判斷。諸本には狂言の詞省かれたれども、狂言夢を判じて其夢を祝ひ、「尋ぬる人に近江、わが子を三井寺」など云ひて三井寺に行く事を勧むるなり。

三井寺 園城寺の通稱。三井は古くは御井と記し江州大津西北の地名なり。

園城寺 天智天皇(志賀に都し給ふ)の皇孫大友與多麿、天皇の遺願を繼ぎて創建し、後智證大師の再興せる寺なり。現に天台宗寺門派の本山。

講堂 七堂伽藍の一、論議問答又は經論を講述する堂舎。

類なき名を望月 名を持つと望月にかけたり。望月は満月。

夕を急ぐ 早く暮れよと夕になるを急ぐなり。

雲を厭ふや 云々 まだ夜とならぬ前より日影を見ては雲の出づるを厭ひ明月といへる名の如く明かにあれと知る人も知らぬ人も共に希ふ意。

雪ならば 云々 「雪ならば幾度袖を拂はまし花の吹雪の志賀の山越え」といふ古歌なるべし。志賀の山越えは歌林良材集に京都北白川の瀧の傍より登りて如意の峯越しに志賀へ出づる道なりとあり。

鳰照る 近江の湖の枕詞。茲は琵琶湖の邊といふ程の意に用ひたり。

上見ぬ 鷲の形容。鷲は雲上高く翔りなほ只下をのみ見下せばなり。

鷲の御山 釋迦の説法せし印度の靈鷲山。こゝには比叡山を見て靈鷲山の様を目前に見る有り難さよと云へるなり。

かなし 愛ら。

白糸 知らぬと云ふを白糸に掛く。次に糸の縁にて乱れと續けたり。

都の秋 云々 古今集に「春霞立つを見すてゝゆく雁は花なき里に住みやならへる」とあるを翻案して花も紅葉も雪もとつゞけ更に雪の降るにかけて故郷と續けなり。よしや花、紅葉、月、雪をも見捨てたりとて、子さへあるならば田舎も住みよかるべしとなり。田舎は前の「都の秋」に對す。

さゝ波 志賀一帯の地の古名。「や」を添へて志賀の枕詞に用ふる慣はしたり。

志賀辛崎の一つ松 云々

志賀の里は今の南滋賀。辛崎は其東の湖岸。一つ松は八景の一とせられし名木。こゝには一つ松も、その色は緑子の緑に同じく殊には唯一つ立てる様のわが子に似たれば、或は子の行くへを知るかと松風に問ひて見んとなり。「頼ならば」はもと「頼なれば」とありしなるべし。

今は厭はじ云々　今は秋なれば松吹く風とも厭はねども桜の咲く頃ならば心づかひなるべしとの意にて桜咲く春と云ひ、花園の名を出す。花園は天智天皇の清時に作られし遊覧地なりといひ侍ふ。「里を過ぐ」を「すきま」にかけ、隙間の風の冷ましきと云ひて秋の水に続け、更に水の縁にて三井と云へり。

桂はみのる云々　李嶠の月の詩に「桂生三五夕」。

あこがれ　心引かれ。

三五夜中の云々　朗詠集にいでたる白楽天の詩句に「三五夜中新月色、二千里外故人心」。新月は新に出でたる鮮かなる月、故人は故舊の意にて友人。詩は月を見て二千里外の友人を思ひ慕ふ意。

水の面に云々　拾遺集に「水の面に照る月並を数ふれば今宵ぞ秋のもなかなりける」。

許から云々　鳰の湖が「水の面……」の歌に適ひてとりわき面白しとなり。

月は山云々　二條攝政後普光園寺殿の連歌の発句に「月は山風ぞ時雨に鳰のうみ」とあり。菟玖波集に出づ。月は山上に照り風は時雨に似たりといふ。「似」を「鳰」に云ひ掛く。

波も粟津　波の淡く見ゆるを粟津に云ひ掛く。

月は眞澄の鏡山　月は明かなる鏡の如く照り輝くとの意につゞけてかすかなる鏡山の景をいふ。鏡山は三上山の東に並べる山。

山田、矢橋　山田は今の栗太郡山田村、矢橋は同郡老上村の一部。

さゝ波や三井の云々　新撰集にある歌。

秀郷云々　三井寺の鐘は田原藤太秀郷が三上山の蜈蚣を退治せし時龍王より贈られしものなりとの傳説による。

清見寺　駿河國興津町なる臨濟宗の名刹。弘長元年明元禅師の開創にかゝる。

龍女成佛　娑竭羅龍王の女八歳にして成佛せし事法華經提婆品に見ゆ。

庾公　朗詠集に「夜登庾公之樓、月明千里」とあるを用ふ。庾公は晋代の人なり。部下の輩の密に樓に登りて月を賞し居たるを咎めざりし故事あり。之を引きて月に興じて鐘樓に登りしを云ひ開かんとす。

影はさながら云々　月影は恰も霜夜の如く澄みたれば鐘の音も冴えわたりて響くならんと。

或詩にいはく云々　團々は月のまどかなる貌。海嶠は海邊の高き山。漸々は徐々。雲衢は雲の巷即ち雲のむれなり。堯山堂外記に一僧あり、夜半時ならざるに鐘を撞きて満城を驚かしたる爲斬られんとしたる時、僧、夜來月の詩を作りえたりと答へて釋されし事を記せり。其詩に「徐々東海出、漸々上天衢、此夜一輪滿、清光何處無」とあり。又江隣幾雜志には南唐の一詩僧秋月の詩を作り「此夜一輪滿」の句を得たれども次句を得ず、翌年の中秋漸く「清光何處無」の句を得、嬉しさの

饒り夜半寺鐘を撞き城人を驚かしたるなる捕はれしが此事を語りて釋されたりと記せり。

聖人 詩僧を指す。

初夜、後夜 初夜は今の午後八時。後夜は今の午前四時。

晨朝、入相 晨朝は今の午前六時、入相は今の午後六時。

諸行無常 涅槃経四句の偈の初句。一切萬物はすべて常住不変のものにあらずとの意。ここには平家物語に「祇園精舎の聲、諸行無常の響あり」とあるを轉用す。

是生滅法 四句の偈の第二句。生あるものは必ず滅すとの意。

生滅滅已 四句の偈の第三句。生も滅も共に無くなること。

寂滅為樂 四句の偈の第四句。涅槃の妙境に達すれば無為寂滅の真楽を得べしとなり。

菩提の道 覺への道。

月も數添ひて 鐘を撞く數の重なることを月日に掛く。

百八煩惱 心身を惱亂する百八の煩惱。寺院にて除夜の夜半より百八の鐘を撞くは百八煩惱を覚醒するに擬すといふ。

五障 女人は轉輪王、梵天王、帝釋、魔王、佛の五となるを得ざるをいふ。法華経に出づ。

真如の月 真は真實、虚妄に非ざるを顯はし、如は如常、變易なきことを表はす。一切萬法の實體にして恒久不變なる真理に月を喩ふ。

長樂の鐘の聲云と 朗詠集に出でたる李嶠の詩句「長樂鐘聲花外盡、龍池柳色雨中深」。長樂は秦の獻公の造りし長樂宮、龍池は唐の興慶宮にある池をいふ。武陵記に見えたる龍池に混ずるは非なり。

ここにも 我國にも。

言葉の林 和歌なり。和歌にし鐘をよめる例多くしとの意を以てかねて高き名を聞くと續けなり。

高砂云と 千載集に「高砂の尾上の鐘の音すなり曉かけて霜や置くらん」。名も高きを高砂に掛く。

曇るか月も 夫木集に為家の歌「はつせ山入相の鐘の聲ばかりくもり殘せる五月雨の空」。

こもりくの 初瀬の枕詞。

難波寺 大阪天王寺をいふ。同じく鐘の名所なり。

山寺の春云と 新古今集能因法師の歌。

妹背 契りたる男女。

きぬぐ 朝の別れに男女の名衣を着ること。

待つ宵に云と 新古今集にある小侍従の歌。

おいらく 「おゆる」の延言「老ゆらく」の轉訛。寝覺と云はん為に置く。

涙心 夢も「無」きを涙の「な」にかく。

月落ち鳥啼いて云と 張継の楓橋夜泊の詩を取る。但し烏を鳥とし江楓を江村と更へたり。

蓬窻 苫を蔽ひたる窻。

揖枕、浮寝 船中に寝る形容。

ごさめれ 「にこそあるめれ」の約言。

人商人 児女をかどはかして労役に賣る人盗人。

面伏 不面目

はづかし 我と我姿の恥かしき意を名所の羽束師の森の名を連鎖として涙の漏るに續けたり。

常の契 男女の契の意。曉の鐘を別の鐘と詠ぜし例多し。

四番目
畧三番

三井寺

八月

子方　千満丸
シテ　母（後ハ狂女）
ワキ　園城寺住僧
ツレ　同従僧
狂言　夢卜者

シテサシ　南無や大慈大悲の観世音さしも草さしもかしこき誓の末。一称一念猶頼あり。まして此程日を送り。夜を重ねたる頼の末。などか其しるしなからんと思ふ心ぞ哀なる　下歌　憐み給へ思ひ子の行く末何となりぬらんゆく末

あはとなりぬらん。枯れたる木にだ
にも。枯れたる木にだにも。花咲くべくは
おのづから。いまだ若木のみどり子よ。
二度あはざら。逢はざらん二たびあはざら
ん。逢はざらんありがたやな。すこし睡
眠のうちよ。あらたなる霊夢を被り
て候よ。わらはをいつも訪ひ慰

むる人の候。あはれ來り候へかし語らば

やと思ひ候 狂言（シカジカ） 唯今少し睡眠のうちに。

あらたなる靈夢を被りて候。我が

子に逢はんと思はゞ。三井寺へ參れと

あらたなる靈夢を被りて候 狂言（シカジカ） あら

嬉しと御あはせ候ものかな。告（ツゲ）に任（マカ）

せて三井寺とやらんへ參り候べし

中入

ワキ次第上（三人）ツヨク

秋もはやそのくれ待ちて。秋も半のくれまちて。月はところや急ぐらん

これは江州園城寺の住僧にて候。又これはわたりに稚き人は。愚僧を頼む由仰せ候間力なく師弟の契約をなし申して候。又今夜は八月十五夜明月にて候程に。稚き人を伴ひ申し。

皆々講堂の庭に出でゝ月を眺め
ばやと存候。

ワキツレ上歌（三人）
類なき。名を望月の
今宵とて。名を望月の今宵とて夕
べを急ぐ人心。知るも知らぬも諸共に。
雲を厭ふやかねてより。月の名頼む。
日影かな月の名たのむ日影かな

後シテ上 一声 ヨワク
雪ならぬ幾度袖を拂ひまし。花の吹雪

と詠じけん志賀の山越えうち過
ぎて。眺めはみづうみの鳰照る比叡の
山高み。上見ぬ鷲のお山とやらんを。
今目の前に拝む事よ。あらありがた
の御事や。かやうに心ある顔なれども。
われは物に狂ふよの。いやわれながら
理なり。あの鳥類や畜類だにも。親子

のあはれ知るぞかし。まして人の親としていとほしと育つる子の行くへ知らぬも白糸の乱れ心や狂ふらん

シテ上　都の秋を捨てゝ行かば

●地　月見ぬ里に。住みや習へるとさこそ人の笑ふらめ。よし花も紅葉も月も雪も古里に。我が子のあるならば田舎も住み

●小謡

よするべし。いざ古里に帰らん。いざ古里
に帰らん。帰れバさゝ浪や志賀辛崎
の一つ松。みどり子のたぐひならバ。松
風にと問ん。松風も今ハ厭ハじ櫻
さく。春ならバ花園の里なりとも早くまぎき
間吹く。風凄しき秋の水の。三井寺に
著きにけり三井寺に。早くつきにけり。

●小謡

ワキカヽル上 桂はみのる三五の暮。名高き月にあこがれて。庭の木蔭に休らへば

シテ げにや今宵は三五夜中の新月の色。二千里の外の故人の心。水の面に照る月なみをかぞふれば。秋も最中夜もなかば。所からさへ面白や

地上歌 ●月は山。風ぞ時雨に鳴の海。風ぞ時雨に鳴の

の海。浪も粟津の森見えて。海越しの
かすかなる向ひ影なれど月はますみの
鏡山。山田矢橋の渡舟のよるは通ふ人
なくとも。月の誘はばおのづから舟もこが
れて出づらん舟人もこがれ出づらん。

シテ詞
面白の鐘の音やな。我が古里にては
清見寺の鐘をこそ常は聞き馴れ

しかれバ。さゞ波や。三井の古寺鐘ハ
あれど。昔に返る聲ハ聞えずまことや
此鐘ハ秀郷とやらんの。龍宮より。取
りて帰りし。鐘なれバ。龍女が成仏の
縁に任せて。わらはも鐘をつくべきなり

地次第上

「影ハさながら霜夜にて。影ハさながら
霜夜にて。月にや鐘ハ冴えぬらん

ワキ詞「やあ／＼暫らく狂人の身にて何とて鐘をバ撞くぞ急いでそのき候へ　シテ「よる庾公が樓に登りしも。月に詠ぜし鐘の音なり許さしめ　ワキ「それハ心ある古人の詞。狂人の身として鐘撞くべきことを思ひもよらぬ事にてあるぞとよ

シテ「今宵の月に鐘撞く事。狂人とてな

（樓の登りしも　トモ）

厭ひ給ひて或詩に曰く。團々として
海嶠を離れ。衝々として雲衢を出づ。
此後句なかりしかば。明月に向つて心を
澄まして。今宵一輪満てり。清光何
れの所よりなるらんと此句をまうけて
あまりの嬉しさに心乱れ。高楼に
登つて鐘を撞く。人々いかにと咎めしに

●鐘の段
獨吟仕舞

これは詩狂と答ふ。かほどの聖人な
りしだに乱るゝ心あり。ましてや
拙き狂女なれば許し給へや人々よ。
煩惱の。夢を覺ませや法の聲も靜
まづ初夜の鐘を撞く時は諸行
無常と響くなり後夜の鐘を撞
く時は是生滅。法と響くなり

地 晨朝の響ハ生滅滅已入相ハ寂滅爲樂と響きて菩提の道の鐘の聲。月も數添ひて。百八煩惱の眠の。驚く夢の世の迷も。はや撞きたりや後夜の鐘よ。われも五障の雲晴れて。眞如の月の影を眺め居りて明かさん・それ長樂の鐘の聲ハ。

●獨吟サシクセ

花の外よつきぬ　シテ　又龍池の柳の色ハ

地　雨のうちも楽し　シテサシ上　●其外とても

代々の人。言葉の林のかねて聞く

地　名も高砂の尾上の鐘。暁かけて秋

の霜。曇るも月もこもりくの初瀬も

地　遠く難波寺　シテ　名どころ多き鐘の音

地　盡きぬや法の聲ならん　クセ　山寺の

春の夕暮来て見れば。入相の鐘に。花ぞ散りける。げに惜めども。など夢の春と暮れぬらん。其外暁の。妹背を惜むきぬ〴〵の。恨をそふる行くへも。枕の鐘や響くらん。又待つ宵に。更け行く鐘の聲きけば。飽かぬ別の鳥は。物かはと詠ぜしも。恋路の便の音

づれの聲と聞くものを。まして老らくの。寢覺ほどふる古へを。今おもひねの夢だにも淚心のさびしさに。此鐘のつくづくと思ひを盡す曉をいつの時にか比べまし

地 月落ち鳥啼いて霜天に滿ちて凄ましく江村の漁火もほのかに半夜の鐘の響は。客の船に

夜すがら。トモ

よや通よらん蓬窓雨滴りて馴れし
は路の楫枕うきねぞ寝る此海は。浪
風も静まりて秋の夜すがら月すむ三井
寺の鐘ぞさやけき・子「いかに申すべき
事の候。ワキ「何事にて候ぞ　子「これなる
物狂の國里を問うて給はり候へ　ワキ「これは
思もよらぬ事をば承り候ものかな。さり

あゝら易(ヤス)き間(アイダ)の事尋ねてまゐらせうずるにて候。いかにこれなる狂女。おことの國(クニ)里(サト)ハいづくの者にてあるぞ

シテ「これハ駿(スル)河(ガ)の國清(キヨ)見(ミ)が關の者にて候

者にて候

子方トモ上「何の清見が關の者と申候か

シテ詞「あら不思議や。今の物狂せられつるハ。正しく我が子の千(セン)満(ミツ)殿(ドノ)ごさめれ。あら珍(メヅラ)し

やが ワキ「暫らく。これなる狂女ハ麁忽(ソコツ)(含)なる事など申者かな。さればこそ物狂まて候 シテカヽル上「のうこれハ物にハ狂はぬ物を。物に狂ふも別(ワカレ)ゆゑ。逢(アウ)ふ時ハ何しに狂ふべき。これハまさしき我が子にて候

ワキツレ詞「さればこそ我が子と申候條(スヂ)なき事を申候。急いでのき候へ 子「あらなかなや

きのみなり音打ちひそみ　言語道断
はや色に出で給ひて候。此上はまつまき
ぐまれ名のり給へ　今は何をか包むべき。
われ駿河の国清見が関の者なりしが。
人商人の手に渡り。今此寺にありな
がら。母上われを尋ね給ひて。かやうに
狂ひ出で給ふとは。夢にもわれは知ら

ぬなり　シテ　またわらはも物に狂ひ事。あの児に別れし故なれば。たまたま逢ひみる嬉しさのまゝ。頓て母よと名のる事。我が子のおもて伏なれど。子故に迷ふ親の身は。恥も人目も思はれず

地ロンギ上　あら痛はしの御事や。よそめも時による物なと逢ふを悦び給ふべし

シテ上 嬉しながらも衰ふる。姿ハさすが恥か
しのもりて餘る涙かな　地上 げに逢ひ
難き親と子の縁尽きせぬ契とて
シテ下 日こそ多きに今宵しも　地 此三井寺
に廻りきて　シテ 親子に逢ふハ　地 何故ぞ。
この鐘の声たてゝ物狂のあるぞとて
お咎めありし故なれば。常の契りハ。別

の鐘と厭ひしも。親子のための契なれ。
鐘ゆゑに逢夜なり嬉しき鐘の聲
かな　かくて伴ひ立ち帰り。かくて
伴ひ立ち帰り。親子の契つきせずも。
富貴の家となりにけり。げにありが
たき孝行の。威徳ぞめでたかりける
威徳ぞめでたかりける。

文學博士 井上頼圀 本文監修
丸岡桂 本文訂正
観世清之 節附訂正

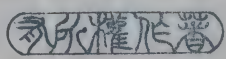
稽古摘要

習ひたる師匠	始めたる年月日	終りたる年月日	稽古	感想
	大正 年 月 日	大正 年 月 日		

使用家の特權

観世流改訂謡本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別能組二十八番二十八冊の各一組、或は三組を悉く買ひ揃へられし節、逓送料を添へて發行所へ送附せられれば、發行所は無料にて五番綴の美本に仕立直し逓送可申上候。かくして使用家は期せざるに一揃の五番綴謡本を得らるべく候

大正版 一番綴

著作權所有

大正十四年一月五日印刷
大正十四年一月十日發行

發行者 東京市神田區今川小路三丁目九番地 土居源太郎
印刷者 東京市神田區東松下町十二番地 鈴木彌作
印刷所 東京市神田區東松下町十二番地 信英堂印刷所

發行所 東京市神田區今川小路三丁目九番地
電話四谷五九五七、振替東京一三四七五
観世流改訂本刊行會

鼓

觀世流改訂謡本

内 三

天鼓

七月

前シテ 天鼓ノ父、後シテ 天鼓
ワキ 勅使

ワキ詞 これハ唐土後漢の帝に仕へ奉る臣下なり。偖も此國の傍に。王伯王母とて夫婦の者あり。かの者一人の子を持つ。其名を天鼓と名づく。彼を天鼓と名づくることハ。彼が母夢中に天より一つの鼓ふりくだり胎内に宿ると見て出生

したる子なれバとて。其名を天鼓と名づく。其後天より眞の鼓ふりくだり。打てバ其聲妙にして。聞く人感を催せり。此由帝聞し召され。鼓を内裏よ召されしよ。天鼓深く惜み。鼓を抱き山中よ隱れぬ。然れども。いづくか王地ならねバ。官人を以て捜し出だし。

天鼓をバ呂水の江に沈め。鼓をバ内裏に召され。阿房殿雲龍閣に置かれて候。又其後彼の鼓を打たせらるれども更に鳴る事なし。いかさま主の別を歎き鳴らぬと思し召さるゝ間。彼の者の父王伯を召して打たせよとの宣旨に任せ。唯今王伯が私宅へと急ぎ候

シテ一セイ上

露の世に。猶老の身のいつまでか。又この秋に残るらん

サシ上

傳へ聞く孔子ハ鯉魚に別れて。思の火を胸にたき。白居易ハ子を先だてゝ。枕に残る薬を恨む。これ皆仁義禮智信の祖師。文道の大祖たり。われらが歎くハ咎ならじと思ふ思に堪へかぬる涙いとおしき。

袂かな

下歌

思はじと思ふ心のなどや
らん。夢にもあらずうつゝにも。うき世
の中ぞ悲しきうき世の中ぞ悲しき

上歌

よしさらば。思ひ出でじと思ひ寝の。
思ひ出でじと思ひねの闇の現に生れ
きて忘れんと思ふ心こそ忘れぬよりは
思なれ。唯何故の憂身の命のみこそ。

恨なれ命のみこそ恨なれ。ワキ いかに此屋のうちに王伯があるか　シテ 誰にて渡り候ぞ　ワキ これハ帝(ミカド)よりの宣旨にてあるぞ　シテ 宣旨とハあら思ひよらずや何事にて御座候ぞ　ワキ さても天鼓が鼓内裏に召されて後。ひろく打たせらるれども更に鳴る事なし。さ

きまゝ主(ヌシ)の別れと歎き鳴らぬと思(オボ)し召さるゝ間。王伯は参りて仕れとの宣旨にてあるぞ。急いで参内仕候へ

シテ「御畏つて参りはさりながら。勅命にだに鳴らぬ鼓の。老人(ロウジン)が参りて打ちたればとて。何しに聲の出づべきぞ。いや〳〵これも心得たり。勅命を背(ソム)きし者の父な

れば重ねて失せん為まてぞあるらん。よし〳〵それも力なし。我が子の為に失せんならばそれこそ老の望なれ。あら懶くまじや頓て参り候べし

ロキかん上「いや〳〵さやうの宣旨ならばこそ。唯鼓を打たせんとの。其為ばかりの勅諚なり。急いで参り給ふべし

シテ上歌「たとひ罪あらば

沈むとも　地たとひ罪あれ沈むとも。
又罪なくも沈までとも　うきかゞら我が
そのかたみよ帝をも拝み参らせん、
帝をも拝み参らせん。　ワキ急ぐ間程なく
内裏にてあるぞ。こなたへ来り候へ
シテ叡慮にては程よ。これまでは参りて候へ
ども。老人の事ちとば。御免あるべく候

ワキ詞「申そ所ハ理なれども。先づ鼓を仕候へ。鳴らずハ力なき事急いで仕候へ

シテ「さてハ辞すとも叶ふまじ。敕よ應じて打つ鼓の聲も出でばそれと

それ我が子のかたみとい月の。よ

輝く玉殿よ。始めて臨む老の身の

地次第上「生きてある身ハ久方の生きてある

獨吟クセ留マデ

シンテサシ上

身ハ久方の。天の鼓を打たよ　その磧礫よならで。玉淵を窺はざるは。驪龍の蟠まる所を知らざるなり

げにや世々毎の假の親子に生れきて

地

愛別離苦の思深く。恨むまじき人をも恨み。悲しむまじき身をも歎きて。われと心の闇ならく。輪廻の波にたゞ

よよ事生く世もいつまでの思の
きづな。永き世の苦みの海に沈むと
かや地を走る獣空を翔る翅まで
親子のあはれ知らざるや。况んや佛性。
同體の人間此生は。此身を浮めざれ
いつの時か生死の海を渡り山を越
えて。彼岸に至るべき　親子は三界の

首枷と聞けば眞よ老心。別の涙の雨の袖。去れぞ増る草衣身を恨みても其思ひのあさきせよ沈む罪科は唯命あれや明暮の。時の鼓の現とも思はれぬ身こそ恨あれ・鼓の時もうつるなり。涙をとめて老人よ。急いで鼓打つべし

シテ上 げにやこれか女君の爲

しや輕命の。老の時も移るなり。急
ぞ鼓打たうよ　地上 打つや打たうや老
浪の。立ち寄る影も夕月の　シテ 雲龍
閣の光さして　地 玉の階　玉の床よ
地 老の歩みも足弱く薄氷を踏む如く
まで。心も危き此鼓。打てばふしぎや其
聲の。心耳を澄ます聲出でゝ。げにも

親子のしるしの聲。君も哀とおぼしめして。龍顔に御涙をうかめ給ふぞありがたき　いかに王伯。老人唯今鼓の音の出でたる事。眞に哀と思し召さるゝ間。老人に數の寶を下さるゝなり。又天鼓が跡をば。管絃講にて御弔ひあるべきとの勅諚なり。心安く

存じ。まづ〳〵老人は私宅に帰りゆくへ

能ノ時ハ謡ハズ

シテ　あら有難や。さらば老人は私宅に帰りゆくべし　中入

ワキカヽル上下　ツヨク　偖も天鼓が身を沈め。呂水の堤に行幸なつて。同じく天の鼓をも急

上歌　糸竹呂律の聲にも。糸竹呂律の

待謡　聲にも。法事をなしてなき跡を弔

ひぞありがたき。頃ハ初秋の空なれバ。はや三伏の夏たけ。風一聲の秋の空夕月の色も照りそひて。水滔々として。波悠々たり　あらありがたの御弔ひや。勅を背きし天罰にて。罪に沈みし身にしあれバ。後の世までも苦みの海に沈み浪に打たれて。

呵責の責も隙ありしよ。思はざる
外の御弔ひよ。うかみ出でたる呂水
の上。曇らぬ御代の。ありがたさよ
ふしぎやなはや更け過ぐる水の面よ。
化したる人の見えたるは。いかなる者ぞ
名を名のれ　これは天鼓が亡霊なるが。
御弔ひのありがたさよ。これまで現れ

來りたり　「さてハ天鼓が亡霊なる
かや然らバかゝる音楽の舞楽も天鼓が
手向の鼓。打ちて其聲出づならバ。
げにも天鼓が證なるべしはやく　鼓
を仕れ　「嬉しやさてハ勅諚ぞと夕月
かゝやく玉座のあたり　「玉の笛の音
聲澄みて　「月宮の昔もかくやと

ワキ上 天人も影向 シテ上 菩薩もこゝよ

天降りまして氣色同じく打つ

なり天の鼓 地上歌 打ち鳴す其聲の。

うち鳴す其聲の。呂水の波ハ滔々と。

打つなりうつなり汀の聲の。より引

く糸竹の手向の舞樂ハ。ありがたや 樂

●仕舞獨吟切ヨリ

シテ 面白や時もげによ

地 面白や時もげによ。

地拍子 前に風

地拍子 浪

秋風楽なれや松の聲。柳葉を拂つて月も涼しく星も相逢ふ空なれや。烏鵲の橋のもとに。紅葉を敷き二星の館の前に風冷まじく夜も更けて。夜半楽にもはやなりぬ。人間の水は南。星は北にたんだくの。天の海づら雲の浪立ち添ふや。呂水の堤の月に嘯き

水よ戯れ波を穿ち袖を返す。夜遊
の舞楽も時去りて。五更の一点鐘も
鳴り。鶏ハ聲のほのぐと夜も明け
白む。時の鼓數ハ六つの巷の聲よ。
又打ち寄りて。覗く夢。また打ち
よりて覗く夢幻とこそなりけれ・

文學博士　井上頼圀　本文監修

丸岡桂　本文訂正

觀世清之　節附訂正

使用家の特權

觀世流改訂謡本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別能組二十八番二十八冊の各一組、或は三組を悉く買ひ揃へられし節、送料を添へて發行所へ送附せらるれば、裝釘所は無料にて五番綴の美本に仕立直し御返送可申上候。かくして使用家は期せざるに一揃の五番綴謡本を得らるべく候

稽古摘要

習ひたる師匠	
始めたる年月日	大正　年　月　日
終りたる年月日	大正　年　月　日
稽古	
感想	

大正七年五月二十日印刷
大正七年五月三十日發行

大正一級版

著作權所有

發行者　東京市神田區今川小路三丁目九番地　土居源太郎

印刷者　東京市神田區佐久間町一丁目一番地　七條愷

印刷所　東京市神田區佐久間町一丁目一番地　七條式金屬版印刷所

發行所　東京市神田區今川小路三丁目九番地
電話本局三七八〇九、振替東京一三四七五
觀世流改訂本刊行會

觀世流改訂謠本
内 三

頼政

五月　シテ頼政（前ハ老人）　ワキ僧

ワキ「これは諸國一見の僧にて候。われ此程は都に候ひて。洛陽の寺社殘りなく拝み廻りて候。又これより南都へ参らばやと思ひ候

道行上ハ天雲の。稲荷の社伏し拝み。稲荷の社ふし拝み。猶行く末は深草や。木幡の關を今越えて。伏見

の澤田見え渡る水の水上尋ねきて。
宇治の里にも著きにけり宇治の里
にもつきにけりげにや遠國まで
聞き及びし宇治の里。山の姿川
の流。遠の里。橋の氣色見所多き
名所かな。あれ里人の來り候
シテ「のう〳〵御僧ハ何事を仰せ候ぞ

ワキ「これハこの處始めて一見の者にて候。此宇治の里ハおしなべて。名所舊跡殘りなく御教へ候へ。シテ「處に住み候へども。賤しき宇治の里人なれバ。名所とも舊跡とも。いさ白浪の宇治の河よ。舟と。橋とハありながら。渡り兼ねたる世の中に。すむばかりなる名所舊跡。何

と答へ申すべき　ワキ詞　いやさやうにハ承り候へども。勧学院の雀ハ蒙求を囀るとそうり。處の人にてましませバ御心憎うこそ候へ。まづ喜撰法師が住みける庵ハいづくの程にて候ぞ　シテ　されバこそ大事の事をお尋ねあれ。喜撰法師が庵ハ。我が庵ハ都の巽しかぞ

住む。世を宇治山と人ハいふなり。人ハ
いふなりとこそ。主だにも申しゝ。尉ハ知
らずや。又あれに一村の里の見えて
候ハ槇の島候か。さん候槇の島とも
申し。又宇治の河島とも申すなり
これに見えたる小島が崎ハ　名にたち
花の小島が崎
向ひに見えたる寺ハ。

小謡

いかさま慧心の僧都の法を説きし寺ぢやな

シテ　のう〳〵旅人。あれ御覧ぜよ

上歌　名にも似ずて。月こそ出づれ朝日山　地　月こそいづれ朝日山。山吹の瀬に影見えて。雪さしくだす島小舟。山も河も。おぼろ。おぼろとして是非を分かぬ氣色かな。げにや名を負ふ。都よ

拍子割
おぼろおぼろおぼろ

近き宇治の里聞きしよ優る名所かな聞きしよ優る名所かな。いよ申し。この處よ平等院と申す御寺の候ほど御覧ぜられて候へ「不知案内の事よて候程よ。未だ見ぬ御事なれば御教へ候へ「こなたへ御出で候へ。これこそ平等院よて候へ。又これなる釣殿と申して。

面白き處にて候よく〳〵御覧候へ

ワキ「げによく〳〵面白き處にて候。又これなる芝(シバ)を見れば。扇(オオギ)の如く取り殘されて候。何と申したる事にて候ぞ

シテ「さん候此芝について物語の候語つて聞かせ申すべし。昔此處に宮(ミヤ)戰(イクサ)のありしに。源(ゲン)三(ザン)位(ミ)頼政合(カ)戰(セン)に打ち負(マ)け給ひ。此

處に扇を敷き自害し果て給ひぬ。
されバ名将の古跡なれバとて。扇の形
に取り残して。今に扇の芝と申候
痛はしやさしも文武に名を得し人
なれども。跡ハ草露の道のべとなつて。
行人征馬の行くへの如し。あら痛はし
やな
げによく御弔ひ候ものかな。

志かも其宮戰の月も日もけふに當りてはいかに　ワキ「何と其宮戰の月も日もけふに當りたるとや　シテ中「かやうに申せばわれながらよそにはあらず旅人の。草の枕の露の世に。姿みえんと來りたり。現となおもひ給ひそとよ

地上歌「夢の浮世の中宿の。夢の浮世の中

宿の。宇治の橋守年を經て。老の浪も打ち渡す遠方人に物申す我れ頼政が幽靈と名のりも敢へず失せにけり名のりも敢へず失せにけり

中入

ワキ 偖は頼政の幽靈假に現はれ我れに詞を交しけるぞや。いざや御跡弔はんと

上歌 待謡 思ひ寄るべの波枕。思ひ寄るべの波枕。

汀も近し此庭の扇の芝を片敷
きて。夢の契を待つぞとよ夢の契を
まつぞとよ血は涿鹿の河となつて。
紅波楯を流し。白刃骨を砕く。世を
宇治川の網代の波。あら閻浮恋しや。
伊勢武者は皆。緋威の鎧著て。
宇治の網代にかゝりけるかな。うたかたの。

あはれはかなき世の中よ。蝸牛の角のあらそひも。はかなかりける心かな。あらたふとの御事や。猶々御経読み給へ。不思議やな法体の身にて甲冑を帯し。御経読めと承る。いかさま聞きつる源三位の。其幽霊にてましますか。げにや紅の園生に植ゑ

ても隱れあらじ。名のらぬさきに。頼政と御覽ずるこそ。恥かしけれ。たゞ〳〵御經讀み給へ

ロ上「御心安く思しめせ。五十展轉の功力だに。成佛まさに疑無し。况してやこれハ直道に

シテ「弔ひなせる法の力

ロ「合ひに合ひたり處の名も

シテ「平等院の庭の面

ロ「思ひ出でたり

シテ「佛在せる。

地上歌「佛の説きし法の場。佛の説きし法の場。こそ平等大慧の。功力に頼み。佛果を得んぞありがたき。

シテ上「今は何をか包むべき。これは源三位頼政。執心の波に浮き沈む。因果の有様現すなり。

●獨吟サシクセ

地サシ上「抑治承の夏の頃。よしなき謀叛を勧め申し。名も高倉の

宮のうち。雲居のよそに有明の月の
都をば忍び出でゝ　うき時しもに近江
路や　三井寺指して落ち給ふ
きる程に。平家は時を廻さず。数万騎
のつはものをば。関の東に遣ると聞く
や音羽の山続く。山科の里近き。木幡
の関をばよそに見てこそ憂き世の旅

心宇治の河橋打ち渡り。大和路指して急ぎしに。寺と宇治との間にて。関路の駒のひまもなく。宮は六度まで御落馬にて煩はせ給ひけり。これはさきの夜御寝ならざる故なりとて。平等院にして暫く御座を構へつゝ。宇治橋の中の間引き離し。下は河波。上に

たつ乱。ともに白旗を靡かして寄せる敵を待ち居たり。●さる程に源平のつはもの。宇治川の南北の岸に打ち臨み。鬨の聲。矢叫びの音。波に類へておびたゞし。橋の行桁を隔てゝ戦ふ。身方には筒井の浄妙。一来法師。敵身方の目を驚かせて。平家

の大勢。橋ハ引いたり水ハ高し。さすが
難所の大河なれバ。さうなく渡すべき
やうも無かりし所よ。田原の又太郎
忠綱と名のつて。宇治川の先陣われ
ありと。名のりもあへず三百餘騎
くつばみを揃へ河水に。少しもためら
はず。むれ居る群鳥の翅を並ぶる羽

音もかくやと。白波に。ざゞつと。うち
入れて。浮きぬ沈みぬ渡しけり　忠綱。
つはものを。下知していはく　水の
逆巻く處をバ。岩ありと知るべし。弱き
馬をバ下手に立てゝ。強きに水を防がせ
よ。流れん武者にハ弓筈を取らせ。
互に力を合すべしと。唯一人の。下知に

よつてさしもの大河なれども一騎
も流れずこなたの岸に。をめいてあが
れば身方の勢。われながら踏みもた
めず。半町ばかり。覺えずさきつて
きつさきを揃へて。ここを最期と戰うたり。
さる程に入り亂れ。われもわれもと戰
へば頼政が頼みつる兄弟の者

も討たれければ今は何をか期すべ
きと　唯一すぢ老武者の　これ
までと思ひて　これまでと思ひて
平等院の庭の面　これなる芝の上に。
扇を打ち敷き鎧脱ぎ捨て座を組
みて刀を抜きながら。さすが名を得し
其身とて　埋木の。花咲く事もなか

りしよ。身のあるはてハ。哀ありけり
あと弔ひ給へ御僧よ。かりそめながら
これとても。他生の種の縁よ今。扇の
芝の草の陰よ帰るとて失せよけり
立ち帰るとて失せよけり。

文學博士 井上頼圀本文監修
丸岡桂本文訂正
観世清之節附訂正

稽古摘要

習ひたる師匠

始めたる年月日　大正　年　月　日

終りたる年月日　大正　年　月　日

稽古

感想

使用家の特権

観世流改訂謡本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別能組二十八番二十八冊の各一組、或は三組を悉く買ひ揃へられ候節、返送料を添へて發行所へ送附せらるれば、裁切料は無料にて五番綴の美本に仕立直し返送可申上候。かくして使用家は期せざるに一揃の五番綴謡本を得らるべく候

大正七年五月二十日印刷
大正七年五月三十日發行

大正版
一番綴

著作權所有

發行者　東京市神田區今川小路三丁目九番地　土居源太郎

印刷者　東京市神田區佐久間町一丁目一番地　七條愷

印刷所　東京市神田區佐久間町一丁目一番地　七條式金屬版印刷所

發行所　東京市神田區今川小路三丁目九番地
電話本局三七八〇九、振替東京一三四七五
観世流改訂本刊行會